
ぴゅあandいのせんと!

C.コード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぴゅあ and いのせんと！

【Nコード】

N63390

【作者名】

C・コード

【あらすじ】

今、とある学校の教室で果てなき争いが始まっていた！

「あのな、あの子は俺たちに必要な存在なんだよッ！」

「バカ言わないで！ そんなこと、絶対にさせないわ！ あの子は私たちが守ってみせるわッ！」

「ええい、ほかの連中に任せてられるか！ 俺たちが引き受ける！」

今日も対立が続いている。一人の少女を巡るこの戦いに終わりは訪

れるのだろうか…！？

「全ては、あの無垢で純粹な……少女のために！」

熾烈だがバカらしい、そんな校内戦争が幕を開けた！

第一部修正完了！ 続話も今後執筆していきたいと思います！

少女の悩み

今、とある学校の教室で果てなき争いが始まっていた！

「あのな、あの子は俺たちに必要な存在なんだよッ！」

「バカ言わないで！ そんなこと、絶対にさせないわ！ あの子は私たちが守ってみせるわッ！」

「ええい、ほかの連中に任せてられるか！ 俺たちが引き受ける！」

今日も対立が続いている。一人の少女を巡るこの戦いに終わりは訪れるのだろうか……！！？

「全ては、あの無垢で純粹な……少女のために！」

熾烈だがバカらしい、そんな校内戦争が幕を開けた！

カタカタカタカタ

パソコンの前の椅子に座り、静かにキーボードで入力する少女がいた。

キーボードで入力している内容は自分が勇気を振り絞って開設した『ブログ』の記事のものだ。

タイトル：校内戦争

本文：

『今日も、私が通学している高校では争いが絶えませんでした！

いったいどうしてなのッ！？ 平穏な学校生活をエンジョイしているのに……。

えっと、いつものことはもう置いておきましょうか！

明日は家庭科の授業で調理実習を行います！

品名は お味噌汁^{みそ}、ほうれん草のお浸し、それから親子丼です！

すごく楽しみです！ だから、お願いだから、明日は落ち着いた日になりますようにッ！』

カチッ

Enterキーを押して、マウスを移動させる。『投稿』をクリックして、記事をブログに乗せた。

「ふううッ！」

背筋を伸ばすと、思わず声が出てしまった。

「ふああ、明日も学校……。」

時間割をみると家庭科が2時間続きで組まれている。

「調理実習、楽しみだなあ。」

呟いた後は明日の準備をして、ベットに入って眠りについた。
そして、少女は願う。

明日こそ、平穏で落ち着いた日でありますように

窓から日の光が差し込んでいる。鳥の鳴き声が聞こえてくる落ち着いた朝。

少女にはそれが至福の時で、一日のなかで最も早く訪れる少女のお気に入りの時間帯だった。

「うーん、朝……。」

目が覚めてからはしばらく窓の外へと視線を向ける。

その後は、自分の部屋から出て、支度を済ませる。少女にとって、朝の支度を済ませてから登校するまでの間は短く思えるものだが一般人にとっては余裕が有り余るほど。それくらい早く起床したのだ。

なぜなら、少女はこの時間帯を、この至福を堪能したいからだ。

そして、時は過ぎていった。午前6時45分。

居間で静かに小説を読んでいると、家族が目を覚まし始めた。

「あら、佳奈^{かな}。今日も早起きなね。お弁当はもう作ったの?」

「うん。みんなの朝食もできてるから。」

「今日は……目玉焼きにしたのね。」

テーブルの上には3人分の目玉焼きと、ご飯、そして質素だが味噌汁が用意されていた。

「覚めちゃうから、起こして早めに食べちゃってね。」

「わかったわ。」

『3人』分のテーブルの上にある朝食。この3人のなかに少女は含まれていなかった。

すでに自分の分は済ませていたので、必要なかったのだ。

時計の針が7時15分を指すころには学校へ行く支度は整って、7時40分になつてようやく

自宅から登校した。

家は学校から近距離にあり、徒歩で通学している。普通に歩けば8時に到着する程度の距離だ。

少女の名前は『羽衣^{はしろも} 佳奈^{かな}』。高校1年生で、

見た目はごく普通の女子高校生である。ややロングで肩より若干下まで伸びている髪は

風が吹くたびに少し靡^{なび}いて、見た人の視線を釘づけにしていた。

学校内では『かなり大人しく落ち着いた生徒、成績は優秀で運動もできる生徒』

という認識で通るように意識して行動していた。

が、そんな羽衣 佳奈の祈りと努力は儚^{はかな}く散った。

なぜなら、学校内では壮絶な口論と劇的な動きが絶えなかったからだ。

その大きな原因は……

午前8時25分。学校内で、教室はすでに登校してきた生徒ばかりでにぎわっている。

その中で今日もお決まりのように口を走らせる組があった。

「だーかーらーッ！ あの子は俺たちの側に着くんだって！」

「そんなこと、直接言っただけでもいいじゃない！ 言えないんでしょ？ ねえ、言えないんだよね？」

「もう見てられん！ 俺は言うぞ！ お前たちはおとなしくそこで見ている！」

「待てえええい！ そんなこと、俺が、いや、俺たちが許さん！」

「あんたが言ったところで振り向くはずないでしょ？ 頭冷やして考えなさいよ！ この運動バカ！」

「ふう、また……なのね。」

羽衣はがつくりと肩を落として自分の席……後ろから3番目、窓側という位置で口論を聞いていた。

「……！ つたく、もう時間だ。続きはホームルームの後でな。」

「そうね、もう、いい加減認めなさいよね。」

「無駄なことを……。勝つのは俺たちだ。」

口論が終了したらしく、良い感じに落ち着いた雰囲気かわぎしが訪れた。

「さて、そろそろホームルームを始めるぞ。日直は……『川岸』か。号令かけてくれ。」

今日もホームルームは口論ののちに始まった。

キンコンカーンコン

「おお、もう時間か。今日の授業はここまで！ 明日は47ページの第2段落から始めるから、

第2段落は1回だけでも読んでおくように。」

今日の現代国語は面白かったなあ。文系はますます好きになれそう。
「起立、令。」

……そろそろ、うるさくなるころかな。

ガタッ 席を立って荒々しく佇む姿。たたず

「この時間で、決着つけるわよ。」

「望むところだ。」

「で、バカの『鏡』かがみ 京也『きょうや』は？」

「む、そうだ、奴は……」

鏡 京也こと愛称『カガミン、キョウヤン』で親しまれている彼は、席でぐったりしていた。

すると、ゆっくりと席を立つ。

「京也。あんたもこっちなさいよ。」

「悪い、今回はパス。お前らでやってくれ……。」

そういうと、教室を出ていく。少し気になったので教室の出口まで行って見てみると、

彼はトイレへと向かったようだった。

「どうしたんだろう。」

キョウヤンはいつも争いを続ける校内ランキング『トラブルメイカー予備軍』の位置づけでは

かなり上位なのに、京に限って疲れた様子だった。とぼとぼと歩幅も狭かった気がする。

そんな羽衣の不安は一瞬で理由は判明し、解消された。

1分後……

「は、羽衣さん……！」

「ふえ？」

声の方向をみると、真横から声がした。が、声の主はいなかった。声は、もっと下のほうからだった。

「羽衣さん……！」

下に視線を移すと、カガミンがいた。床にはいつくばる形で声を掛けられていたので

羽衣 佳奈は異様な光景で反応に戸惑った。

声はえらくボリウムが小さめでこそそツト話しかけてきていた。

「え、え、カガミン……!？」

「こ、声は小さめをお願いします！ 今回は、お願いがあつて……。

」

「わ、わかったから、楽にしていよ。つらいよね？」

「す、すまない。」

代替予想はついていた。トラブルメイカーといえど、あの口論をしているメンバー。

おそらく、ああ、きっと、この口論の行く先が、ゴール地点が訪れた歌のように思えた。

「お願いします、俺たちの側に、着いてください……!」
!？」

え、え、ええええええええ!？」

私、いったい何かに巻き込まれようとしている!？」

学校は、私に平穏を与えてくだらないようだった。

少女の困惑

「お願いします、俺たちの側に、着いてください……！」

え、え、ええええええええええ！？

私、
いたい何かに巻き込まれようとしている!?

学校は、私に平穏を与えてくださらないようだった。

「あの、で、できれば理由を聞かせてほしいな……。」

「理由……そうだった、そこからまず話さないと。」

ふうつと一息ついて落ち着かせると、カガミンはまた話し始めた。

「俺、いや、俺たちは……羽衣さん。君と、……友達になりたいんだ！」

$$\vdash ?$$

「と、とにかく、詳しくはこれを見ておいてほしい!」

そういうと、彼は一枚の紙切れを机の上にポンと置いた。

「そ、それじゃ、詳しくはそこに書いてる場所で落ち合ってからで！」

言いたいことを言いつくしたのか、彼は床に極力体をつかづける形で自分の机まで戻ると、

椅子に座る。そして、そこから急に……先ほどとは全く別人のように意気揚々と立ち上がり、

口論に中に割って入るのであった。

もつとも、トラブルメイカーの代名詞なので、何をしても基本クラスから非難を浴びることはないし、
みんなも笑ってくれるしで行動範囲にも幅が広いので彼にしかできないことも多い。

「ハッハッハ、今日この時も君たちは愉快で楽しそうだな。」

「……どうしたの、京也？ 頭でも打った？」

「むしろ楽しそうなのはお前のようにも見えるが？」

「クツクツ、当たり前だろ！ 何しろ、今日でこの果てなき口論地獄から脱出できるのかと思えば、

笑いが止まらんよ。ワッハッハッハ！」

「な、ちよっと！ あんた、まさか告発してきたの！？」

「さあ、どうだろうなあ？」

「いいから白状しなさい！」

「俺が白状している間に、」住田 幸四郎すみだ こうしろう「君が突撃してしまうかもしれないぞ？」

「隙あらば、いつでも準備はできている。」

「グ……覚えてなさいよ。」

「もうすぐ授業の時間だな。せいぜい授業中に策でも練っておくんだな。ま、俺の勝利は目前だな！」

口論は、雰囲気から察するにカガミンの圧倒的な優位に立ったことは間違いないだろう。

何しろ、授業中はカガミンが恐ろしいほどのニコニコ笑顔で授業を受けていたからだ。

ノートもいつも以上にまじめにとっていて、教諭も驚きを隠せない様子であった。

そして、学校生徒から明らかにカガミンの様子が異様なことから今日、9月21日は京也が爆裂ニコニコ笑顔を炸裂させたことから『幸福』やら『異様』やら、

『笑顔』やらの象徴ということで『記念日』扱いを校内で受けることとなった。

「京也の奴、また新しい伝説を作ったとか。」

「ああ、記念日まで作り上げちまうとは未恐ろしい野性児だ……！」

「それと比較して……『吉野』や『住田』はなかなか異様な雰囲気だ……。」

「あ、ああ。あれは半端な度胸じゃ横を通れないぜ。」

カガミン、キョウヤンこと『鏡 京也』にとっては至福の日。

吉野、住田にとっては厄日のように感じられる日であったが、

何があったのかは生徒間では色々な噂が立った。最も、事情を知るのは本人のみであるが。

ため息交じりに紙片をとる。文字が丁寧に書かれてあった。

『放課後、視聴覚室の正面の階段を下りたところにあるトイレの前で待っています。』

これは、私にとって何なの？ も、もしかしてラブレター！？
いや、でも、カガミンに限ってそんな手紙を私に……？
……放課後は行ってみるのかなさそう。

調理実習はつつがなく終了した。

この時は比較的平穏であり、少女にとっては思いがけずに訪れた幸福ともいえよう。

そして、放課後は訪れた。

「視聴覚室の正面の海岸を降りたところにあるトイレの前……。」「
回りとどい書き方だけど、カガミンのことだから意図があるんだろうなあ。」

イタズラじゃなければいいんだけど……。
だけど、必死な表情で頼まれちゃったから断れなかったんだよね……。

「ここね。」

トイレの前には、カガミンがいた。

「……羽衣さん。」

「用があるんでしょ？ 遠慮なく言っていーよ。」

「えっと……休み時間に行ったことについてなんだ。」

「……友達になってほしい。だっけ？」

「あ、ああ。口止めされていたんだが、きっぱり言う。俺と吉野、
住田はここ最近、

毎日のように口論してたんだけど、その原因が……君なんだ。」

「え、ええええ！？ わ、私ッ！？」

「ああ、いや、羽衣さんが悪いわけじゃないんだ！ 色々あって今はこうなっちゃったけど……」

「そ、その色々って、何があったの？」

「……あれは、入学してから1カ月たったころだった。俺が所属している『同好会』があるんだ。

そこに、君を誘おうと思ったんだけど、それが吉野や住田にばれちゃってな……」

バレてから知ったんだが、吉野、住田も羽衣さんを狙っていたみたいなんだ。

だから、俺たちがぶつかって、今にいたってるってわけ。」

「……つまり、カガミンたちは私を同好会に入会してほしいの？」
「もちろん！」

真剣なまなざしだった。

「えっと、カガミン達の同好会って、何の同好会？」

「俺は……ホントはこんなこと恥ずかしくて言えないけど言つよ。実は『コンピュータ』の同好会のメンバーなんだ。」

「え、嘘!？」

あんなに人気者なのにコンピュータの同好会にも入ってるんだ！

そしたら扱いとかも上手なのかな!？」

世の中はきつとこういう人材を必要としてるんじゃないかと思うと、すごいなあって思っちゃうな。

「……吉野は陸上部。住田は野球部のマネージャーとして引き込まれたかったみたいだ。」

「へえ。そうだったんだ……。」

知らなかった。まさか、知らないところでこんなにも壮絶なことが繰り広げられているとは……

個人的に言つと、運動は……成績ではそこそ良い評定はもらっているけど疲れるからいやだなあ。

第一印象から出言わせてもらつとカガミンの入会しているコンピュータ同好会のほうがいいかも。

「うーん、そういうのはちょっと家族と相談してから決めてもいい

かな？」

「もちろんです！」

ノロノロと帰宅を繰り返す日々よりは充実するかもしれないし、そのほうが高校生らしいかも！

「それじゃ、俺はそろそろ行くね。決断が出たらメールで……あ、メールアドレスが……」

「こ、交換、する？」

「あ、そ、それじゃ、お願いしようかな……」

ずいぶんと、カガミンが固くなっちゃってる気がするけど、気のせいなのかな……？

「はい、次はカガミンが送ってね。」

「お、おう。」

……………完了っと。

「私はそろそろ帰るね。それじゃ、また明日。」

「ああ、明日な！」

同好会かあ。ちょっとワクワクするかも！ 入会は本当にしちゃってもよさそうかな。

カガミンもいるし、楽しそう！

帰宅後、ブログの更新を終えると、母に言った。

「お母さん。」

「ん、どうしたの？」

「同好会に、入ってもいいかな？」

「そうねえ、高校生なんだし、そういうのもいいかしらね。何に入るか、決めてらっしゃい。」

入会した時に、費用のこととかも全部伝えてくれるならそれでいいからね！」

「うん！」

就寝に着く。この日はぐったりと疲れていたらしく、少女は深い眠

りに就いた。

そして、明日の学校は……一段とクラスの雰囲気は騒がしくなっていた。

少女の傍聴

騒がしい教室に忍ぶ思いで入室し、静かに席に着く。

到着時間は思ったよりも早かったためか、クラスに人気はなかった。室内には彼女を含む4人のみで、席に着いた瞬間から思いもよらぬ沈黙が漂った。

うう、どうしよう……。

他の人、みんな別のクラスに言っちゃってて空気が重いよう……。それにしても今日に限って3人がバツタリ対面してるなんて……。それも朝早くに。

何か、あったのかな？ それともただの偶然？

3人に深い関わりあいとかはなかったはずなんだけどなあ。

あ、カガミンだけは昨日会ったっけ。でも、お話したただけだし……

うーん。

考えていると、不意に会話が耳に入ってきた。

「京也、あんた、やっぱり何かあったんでしょ？」

……昨日のこと、バレてる……？

カガミン、昨日あれほど余裕そうなこと言っちゃったもんね。ちよっと興味あるし……聞いてるふりしても問題ないよね？

カバンの中からブックカバーに包まれた小説を1冊取りだし、ペー
ジをめくる。

『フリ』だけはちゃんとしてバレないようにしなきゃ……！

手に取った小説は厚みは普通、内容の量も割と浅めのものだ。

羽衣 佳奈はすでに読破済みだが………それを知るのは彼女のみだろ
うと、

確信していた。

適当にページを捲り、3分の1程度のところで読む演技を始めた。

「何かあっただって？」

「そうよ。昨日のいつからか忘れたけど、あの高揚ぶりは並じゃな
かったもの。」

「全くだ。早々に吐いとけ。」

うっ、やっぱり感づかれてる！

「お前らも案外鈍感だな。」

「な、なんですって？」

「どういうことだ！」

余裕の態度で2人から徐々に遠ざかるように歩きながらカガミン言
った。

「お前らな、『あれほどの変化』があってなぜ気がつかない？ そ

うさ、二人の読み通り。

俺はお前たちの……『何かあったのか？』という質問にはYESと答えておこう。」

「やっぱり……！ 無断申告は禁止ってルールを忘れたの！？」

「ふざけるな！ そのルール以外にも条件は山ほど付いていただろうが。」

ルールには『話し合いによる平等な結論が出なかった時、自己申告が適用される』っていう、

列記とした条件が定められていたはずだ！ そして、その和解に与えられた期間は1カ月ジャストだ！」

「1カ月ジャスト……！？ ま、まさか！」

「そう、そのまさかだよ！ 昨日はすっかり条件の1カ月を満たしていた！」

「な、な、そ、そんなの」

「無効、か？ おいおい、条件って、こういう時のために定めるもんじゃなかったのか？」

そもそも、条件とか言い出したのは吉野……お前じゃなかったか？」

「ゲ……。」

「そ、そういえば……。」

「ここで破れば条約破棄。全部、破綻^{はたん}だ。……俺の申告を除いてな。」

吉野、住田が鎮まる。

「全く、何が『条件』だ。何が『申告』だ。最初からこんなことしなければよかったんだよ。」

「フ、フフ……勝者になれてさぞいい気分でしょうね。」

皮肉めいた一言が、京也にむけられたが……彼は誠意をこめて言った。

「ああ、俺は勝ったよ。だから言ってる。最初からこんなもの無意味だったってよ。」

「……そんなに、勝つ自信があったの？」

「違えよ。何もなかったなら自由に勧誘もできたし、交渉の機会はいくらでもあったってことだ。」

「なんでわざわざ敵対してる3人で和解せにゃーならんだ……。終わるわけ、ないにきまつてる。」

「なかつたら、今頃こんな勝ち負けで悔やむことなんてなかったのによ……。」

「……全部、私の提案が間違ってたって言いたいの？」

「ああ、そうだな。これも勝った側からいわなきゃわからんだろ？あんな、『勝った』からってなんでもうまくいくとは限らねえ。一つのことで勝つても、

その先に続かなけりゃ水の泡さ。だから、こんな条件なんて全部忘れちまえ。」

「お前たちにも、チャンスはあるんだからよ。」

「……！！」

「……まるで、私には無関係な会話をしていると思ってるのかな？なら、いままでクラスで激しい口論をしても合点がいくし、ここで勃発してる理由としても通る気がする。」

「そうか、そういうことを言いたかったのか！」

「住田は、何かを理解したようだ。」

「察しが良くて助かる。ま、先手はいただくけど、運が良けりや……。」

「その時はお前たちで考えればいい。とにかく、俺はこんな協定はもう辞めるからな。」

「そういうと、教室から出て行った。」

「……吉野、お前も理解したか？」

「あつたり前でしょ！……食えない奴よね。全く……。」

「ブツブツ言つと、吉野は自分の席に着いた。それをみると、住田も席について携帯電話を取り出して操作を始めた。」

……なんだか、事情を知ってるからいてもたってもいられない雰囲気になってきてる。

き、聞いても問題は……。

「あ、あの、吉野さん。」

「ん、え、羽衣さん！？ え、えっと……何？」

「さっきの話なんだけど……。」

「き、聞いてたの！？」

「え、う、うん……マズかったかな？」

「ううん、全然！」

「なら聞きたいんだけど、さっきの口論って、私……を巡ってやってるんだよね？」

「ッ！？」

それを聞くなり、ガタツと席を立ち、クラスから出ていく。
ため息をつく住田。

のちに……

「コオオラアアア京也！ バラしたんでしょ……！」

「うお！ なんだよ一体！ ええ！？」

「バラした！ あんた条件破ったわね！ 無効よ！ あんたの申請は無効ッ！」

「バツ力野郎！ 俺はもう『抜けた』んだよ！ 今更見苦しいぞ、吉野オオオオ！」

抜けたやつ相手に自分のルールを乞わせるのは『強制』だろ？ それこそルール違反だぜ。」

「ググ、もういいわ！ なら、私も言うんだから！」

「好きにしろ！ ま、お前の度胸でどうにかなる問題だといいいけどな！」

以降、本格的に閉廷となったような感じになり、あまりにも平和的なホームルームの始まりがあった。

ほっ……。

最後の最後でカガミンは何を言いたかったんだろう？

3人はみんな理解してるみたいだけど、うーん……今更聞きづらいよう……！！

ホームルームが終わり今迄から見てみるとさわやかな休み時間。いままで

うれしい気持が表に出てきたのか、佳奈は休み時間はずっと微笑んでいた。

すると、携帯が振動してきた。メールだ。誰からだろう？

『送信主：カガミン』

件名：用事

本文：今日も放課後の清掃が終わったら、昨日の場所で話が見たいんだ。

もしよければ、メールで返事をください。』

えっと、今日も？

バレなきゃ、いいんだけど……。

不安の種は再び芽生えて、安心はあっという間に不安に変わったてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6339o/>

ぴゅあandいのせんと!

2010年11月11日22時28分発行